Chapter2
広報あらおを作ってきた先人
～ People have made Public Relations ～

60年を超す広報紙の歴史は、広報紙を作りあげてきた先人たちの歴史でもあります。まちを見つめ、ひとに触れ、そのときどきの荒尾を伝えてきた広報担当者。その思いに触れてみました。

「広報紙はまちのタイムカプセル。その時のまちの姿、ひとの動きなどが当時の状態のまま詰まっています。だから未来への責任を感じて作っていましたね」

平島廣幸（ひらしまひろゆき）さん　井川口在住。
昭和57年7月～平成9年3月、広報紙づくりに携わる。市役所を退職後、九州荒尾オリーブ村理事として活躍中。

全てが手作りだった時代からデジタルの時代へ

平島さんが広報担当となった当初は全ての原稿を手書きで作っていました。「各部署からの掲載依頼記事を市民にも読みやすいよう全て手書きで書きなおし、レイアウト用紙に書きつけていました。ペンだこは懐かしい思い出です」。その後日本にもデジタル化の波が押し寄せ、広報紙もパソコン上で作成できるようになり、平島さんはすぐに導入に動きました。「自分の思うように広報紙が作れるという環境は、より市民に密着した広報紙が作れて魅力的だと思いましたし、作業の効率化にもつながります」。今でも広報あらおはパソコン上で紙面の全てを作成しています。

取材でまちを駆け回っていた日々

「フットワーク軽く、どこでも取材に駆けつけていました」と話す平島さん。どこそこの地区でお祭りがあると聞けばカメラを持って駆けつけ、時には災害の現場に駆け付けることもあったといいます。「市内で1年間に催される大小のイベントをリストアップして、自分なりのイベントカレンダーを作っていました。広報担当者は机の前にいるだけでは仕事にならない。現場に出てこそだと思います」

印象深かった中国での取材

印象に残った取材はと尋ねると、「中国へ訪中団を派遣したのですが、記録係として帯同したことです」。これは、平成4年に市政50周年記念事業で広州市、桂林市や中山市などを小中学生50人を含む訪中団百人で歴訪した事業です。各市の市長や市民と訪中団との交流の様子を、カメラ・ビデオカメラで記録をとりながら、同時に取材もこなしていた平島さん。海外での取材も初めてとあって、「1週間ほどの滞在期間があっという間でした。とても良い経験をさせてもらいました」

市民が参加する広報紙を目指して

平島さんは広報あらおの紙面改革にも取り組みました。「広報紙は行政からの情報をお知らせするためのものというだけでは市民には見てもらえません。市民が関わり、動いていくきっかけを作ることも広報紙の役割です」。広報あらおにこれまで以上に市民の登場機会を増やし、「ふるさとを歩く」、「えんぴつリレー」などをはじめとした市民参加型の連載を開始しました。「ふるさとを歩く」は、荒尾のさまざまな場所の風景の絵・写真とそれにまつわる文章を市民から寄せてもらうコーナーで、「えんぴつリレー」は市民から市民へとリレー形式でエッセイを書いてもらうコーナーです。そして、広報あらおを象徴する表紙の題字募集のコーナーも平島さんが始めた企画でした。

広報紙はまちの記憶のタイムカプセル

広報紙の役割として、まちの記憶をとどめていくことの重要性を平島さんは説きます。「三池炭鉱が閉山した時、取り壊される前の誰もいなくなった緑ケ丘の炭坑社宅を取材しました。今ではリニューアルタウンとなり当時の面影は全くありません。歴史の地層に埋もれていってしまうかもしれない、多くの人が何気なく過ごしている『今』の荒尾市を『今』のままで記録していくことは、とても大切なこと。未来の荒尾市にとって大きな財産となります。これからの広報あらおにも大いに期待したいですね」

Chapter3
市民の背中を後押ししてきた広報あらお
～ Public Relations promoting Citizen Activities ～

広報あらおの裏表紙で連載中の「ひとのちから」。平成23年1月1・15日号でのスタート以来、荒尾市に在住、ゆかりのある人のさまざまな活動や業績を取り上げてきました。生き生きと頑張っている人を紹介していく中で、読者の皆さんに少しでも前向きな気持ちを持ってもらえればとの願いも込められた広報あらおの名物企画です。以前に掲載された、プロモトクラスライダーの畑尾樹璃（はたおじゅり）さんにお話を伺いました。

畑尾樹璃（はたおじゅり）さん
1996年生まれ。倉掛出身。
所属チームはTE SPORT。
全日本モトクロス選手権
レディースクラス参戦中。

「モトクロスという競技を少しでも知ってもらえたのかなと思います。同級生や知り合いからの反響が大きくてうれしかったですね」

モトクロスという競技を知ってもらいたくて

モトクロスは、オートバイで未舗装のコースをいかに速く走るかを競う競技です。ウォッシュボード（洗濯板）というデコボコの道を走ったり、バイクに乗ったままジャンプしたりと、迫力満点です。しかし、競技の知名度があまり高くはないため、もっと知ってもらいたいという気持ちがありました。そんな時に当時の広報紙担当の人から取材のお話を頂いて、市民の皆さんに知ってもらう絶好の機会だと思いました。

ドキドキしたけど楽しかった取材

担当の人に家まで来てもらい、取材してもらいました。私は少し緊張していたのですが、いざ取材が始まると、終始和やかな雰囲気で楽しかったですね。担当の人には菊池郡大津町のレース場（HSR九州）にも取材に来てもらい、レースの模様を撮影してもらいました。

大きかった反響

実際に広報が配られた後は、反響の大きさに少し驚きました。友人、同級生など自分の身近な人だけではなく、母や祖母の知り合いの人からも「広報紙見たよ。すごいね」などの言葉を頂き、市民の人にモトクロスという競技を知ってもらえたことがうれしかったです。学校や周りの人の支えがないとモトクロスという競技はできません。広報紙に掲載されたことで、競技への理解や、応援に来てくれる人が少しでも増えたことは良かったと思います。

まずは全日本チャンピオンを目指して

現在は全日本モトクロス選手権レディースクラスに参戦しています。第4戦では優勝を飾ることができました。しかし、目標はあくまで全日本チャンピオンです。残りの全戦勝ちたいと思っています。簡単ではありませんが、一戦一戦大事に戦っていきます。そして今後は世界選手権に全レース参戦し、どこまでやれるかチャレンジしたいですね。モトクロスは選手とお客さんとの距離が近く、迫力のあるレースが近くで見られます。まだ見たことがないという人はぜひ一度見に来てもらえるとうれしいです。市民の皆さんにもっと知ってもらえるよう活躍したいと思います。

畑尾さんの最新情報は
こちらをチェック！

モトクロスライダー畑尾樹璃
オフィシャルサイト